出る杭研究　ワンちゃんにとって匂いって大事？

薄田砂咲・吉川茉那・永澤美保・中野和彦・久世明香・菊水健史

研究の背景と目的

イヌに人為的に匂いを嗅がせて行動が変化するかを見た先行研究は多く、匂い嗅ぎに良い効果があることがわかった。しかし、主体的な匂い嗅ぎ行動の効果を示す証拠は限られている。
イヌの主体的な匂い嗅ぎの重要性を明らかにし、イヌの福祉に配慮した飼育やQOL向上の可能性について検討する。

<目的>
調査1：散歩中のイヌにおける匂い嗅ぎスポットの特性を調査し、犬種、年齢、性別、および避妊・去勢の有無との関連を検討する。
調査2：匂い嗅ぎがイヌの行動およびストレス状態に与える影響を検証する。

研究・調査方法

調査1：飼い主にイヌが匂い嗅ぎした場所を位置情報付きで撮影してもらい、それをGoogle My Mapにまとめた。調査の始まりと終わりにアンケートを実施した。

調査2：一般家庭犬を対象に散歩中の匂い嗅ぎの有無によって、散歩前後の分離操作時におけるイヌのストレス反応の違いを調べた。ストレス反応は、唾液中コルチゾールと分離時の行動（focus、door pawing）の比較を行った。



図1:調査2の実験の流れ

結果と考察

調査1：現時点では、6名の飼い主に協力してもらった(図2)。今後も引き続き行い、データを集める。

調査2：
匂い嗅ぎの有無と散歩前後の間に有意な交互作用が認められた(表1)。事後検定の結果、匂い嗅ぎあり散歩条件では、散歩前の分離によるコルチゾール値の増加量は、匂い嗅ぎなしの条件より有意に高かった(図3)。匂い嗅ぎあり散歩条件では、散歩後にコルチゾール値の増加量は低下する傾向が見られた(図3)。

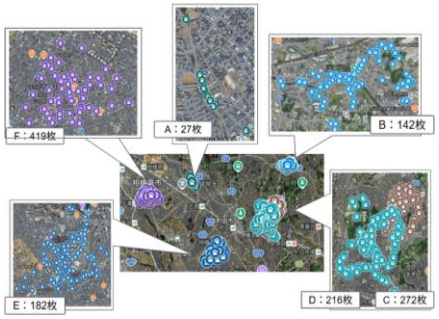

図2:調査1のまとめ

➡カウンターバランスの調整が不十分で、新規環境による影響が大きく出てしまった可能性。

表1:コルチゾール濃度

変数	推定値	標準誤差	分母自由度	t値	p値
切片	-0.376	0.48	39.1	-0.78	0.439
性別	-0.461	0.39	19.4	-1.18	0.252
年齢	0.064	0.057	19.5	1.11	0.281
匂い嗅ぎの有無	-0.229	0.448	61.6	-0.51	0.612
散歩の前後	-0.576	0.461	62.7	-1.25	0.216
匂い嗅ぎの有無×散歩の前後	1.677	0.643	62.2	2.61	0.011

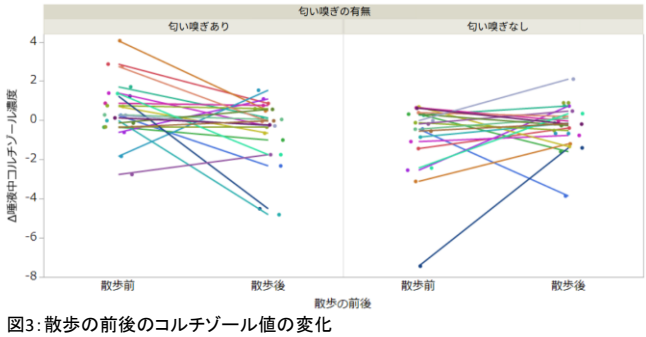

図3:散歩の前後のコルチゾール値の変化

これから

調査1：次年度のジェネプロ生に引き継ぎ、アンケート内容と匂いを嗅いだ場所との関連について、継続的にデータ収集を行ってもらう。
調査2：今後行動実験を行う際は、実験計画の段階で対象個体の条件を設定し、カウンターバランスが取れるように条件に合う個体を選択する。